

二松学舎大学人文学会第一二一回大会 研究発表要旨・座談会題目

日時 二〇二〇年二月五日(土)
会場 二松学舎大学人文学会 YouTube チャンネル

研究発表

井上哲次郎「支那哲学史」を
通して見る夏目漱石「老子の哲学」

文学研究科中国学専攻博士後期課程一年 鈴置 拓也

本発表では、帝国大学文科大英文学専攻二年の夏目漱石が、井上哲次郎の東洋哲学史の講義を聞いて執筆したとされる論文「老子の哲学」と、二松学舎大学に所蔵される井上哲次郎の講義録「支那哲学史」を比較し、漱石の論文が井上の講義の影響を強く受けていたことを明らかにする。

「支那哲学史」は、これまで公にされることがなかったために、従来の漱石研究では論じられることはなかったが、講義の時期及び老子に関する記述が「老子の哲学」と重なっている。したがって両者を比較すれば、複雑難解で体系的でない老子の思想を論理的に再構成したという従来の「老子の哲学」に対する評価が、実際には井上の講義へ向けられるべきものであることが分かる。例えば、老子の思想を「道」によって一元的に論じ、その「道」を cosmology と結び付けて理解するところなどは、既に井上の講義録に見られる。

両者を比較検討し、井上の老子講義の特徴を明らかにするとともに、漱石がそこから影響を受けた点、及びその講義を踏まえた上でなされた彼独自の老子に対する見方を考察していく。さらにその後の漱石にとって同論文がもった意義についても言及したい。

夏目漱石「夢十夜」「第九夜」論

——「御父様は何処」へ——

文学研究科国文学専攻博士後期課程三年 バク・ヨンソン

『夢十夜』の「第九夜」の「若い母」は夜中に子供を背負って八幡宮へ赴き、戦争で連絡が途切れた夫の無事を祈ることをしている。背中の子供が拝殿前の「鈴の音」で目を覚まし、泣き出すという記述と、祈念し続ける「若い母」のイメージが読む者に象徴的な印象を与える。この「若い母」は次の小説『三四郎』の「汽車の女」と類似したイメージを持つといえる。大連へ出稼ぎに行った夫を待つ「汽車の女」は、小説の冒頭で三四郎と同じ宿の部屋に泊まるが、その際に宿の外で「鈴の音」が出る子供用の「玩具」を買い、「がらんがらん」という音を鳴らす。『夢十夜』の「若い母」と『三四郎』の「汽車の女」は、夫の不在と「鈴の音」のイメージで結びついているのである。そしてまた、四年後の小説『彼岸過迄』では、森本